フィンランド語の複数属格 ・分格における語尾異形態の分布について – コーパスデータからの視点 –

千葉 庄寿 (ちば しょうじゅ)
東京大学大学院

1997 年 6 月 28 日 (土)
第 24 回ウラル学会 (於 成蹊大学)

1 フィンランド語の名詞類の格変化と異形態

フィンランド語の名詞は 語幹+(数)+(格)+(所有語尾)+(小辞) の順序で屈折要素を語幹の後に並べる膨着性の強い格変化をする。

フィンランド語の名詞の格変化には非常に多くの種類の異形態がある。例えば、 2 音節の語幹 *kieli* 「言語」は後に来る屈折要素によって kieli, kiel-, kiel- のようにその語幹部分が変異する。

(1) a. kieli 言語 (主単) 「言語」
b. kiele-n 言語-属 (単) 「言語の」
c. kiel-tä 言語-分 (単) 「言語を」(話す)

同様に、格語尾にも複数個の異形態をもつものがある。(2) は分格単数の異形態。

(2) a. kiel-tä 言語-分 (単) 「言語を」(話す)
b. ove-a ドア-分 (単)

所有語尾にも異形態が存在する。

(3) a. kieli-e-nsa 言語-属複-所接 3 「彼 (女)(ら) の複数の言語の」
b. kiel-tä-än 言語-分単-所接 3 「彼 (女)(ら) の言語を」 (話す)

1.1 複数属格 ・分格の異形態の 「ゆれ」

相補的な分布パターンとは異なり、今回扱う複数属格 ・分格の語尾には極めてシステマティックな**ゆれ**が起こることがある。

(4) 複数属格 ・複数分格の異形態のペア

	A 語尾	B 語尾
複数属格	-i-den [~ -i-tten]	-(i)/j-en
複数分格	-i-ta/tä	-j-a/ä

(複数属格 A 語尾のカギ括弧で括られた語尾は、-i-den の文体的ヴァリアントで、出現環境は A 語尾と全く同一である。また、丸括弧内の複数形態素のヴァリアントは、形態素 -i- が *i* 語幹の複数属格で、直前の語幹末母音 i と融合し、鞄型形態素となる (F. Karlsson 1983 [9,286])。例に注意。)

2 種の語尾はどちらも非常に生産的でニュートラルである。この異形態ペアでも、語幹によっては、どちらか一方の語尾だけが選択され、交替は起こらない。このようなゆれのない語幹で最も典型的なのは、A 語尾のみをとる単音節語幹、2 音節 B 語尾のみをとる 2 音節語幹である。

(5) *maa* 「地」
ma-i-den 地-複-属$_A$ *ma-j-en 地-複-属$_B$
ma-i-ta 地-複-分$_A$ *ma-j-a 地-複-分$_B$

(6) *talo* 「家」
*talo-i-den 家-複-属$_A$ talo-j-en 家-複-属$_B$
*talo-i-ta 家-複-分$_A$ talo-j-a 家-複-分$_B$

しかし、3 音節以上の短母音幹の名詞類には、どちらがついても文法的で、しかも意味的、文体的な役割分担を前提としない語幹が存在する。

(7) *muusikko* 「音楽家」
muusiko-i-den 音楽家-複-属$_A$ ~ muusikko-j-en 音楽家-複-属$_B$
muusiko-i-ta 音楽家-複-分$_A$ ~ muusikko-j-a 音楽家-複-分$_B$

(8) *hormoni* 「ホルモン」
hormone-i-den ホルモン-複-属$_A$ ~ hormoni-en ホルモン-複属$_B$
hormone-i-ta ホルモン-複-分$_A$ ~ hormone-j-a ホルモン-複-分$_B$

(9) *näyttely* 「展覧会」
näyttely-i-den 展覧会-複-属$_A$ ~ näyttely-j-en 展覧会-複-属$_B$
näyttely-i-tä 展覧会-複-分$_A$ ~ näyttely-j-ä 展覧会-複-分$_B$

このような語幹は生産的で、従って新語も次々に生まれる。したがって、この「ゆれ」も極めて規則的におこるものであり、(例えば以下の (10) にみるような、) 何らかの文体的・意味的差異を前提とした比較的周辺的な語尾のゆれ (Carstairs 1987 [3,31]) とは性質が異なる。

(10) a. vaikea-[a] 難しい-分 (単) (文語調)
b. vaikea-[ta] 難しい-分 (単) (口語調)

(10) で、同一の語幹 vaikea についている 2 種の単数分格語尾には、口語・文語の文体の違いによって分布が異なる。

ただし、多音節の語幹にも、今挙げたような両方の語尾が現れうる語幹とは逆に、A, B のうち、どちらか一方のみを用いる強い傾向をもつ語幹が存在する。

(11) *tavara* 「荷物」
tavaro-i-den 荷物-複-属$_A$ ~ ?tavaro-j-en 荷物-複-属$_B$
tavaro-i-ta 荷物-複-分$_A$ ~ ?tavaro-j-a 荷物-複-分$_B$

(12) *kanuuna* 「大砲」
kanuuno-i-ta 大砲-複-分$_A$ ~ ?kanuuno-j-a 大砲-複-分$_B$

(13) *korjaamo* 「整備工場」
korjaamo-i-den 整備工場-複-属$_A$ ~ ?korjaamo-j-en 整備工場-複-属$_B$
korjaamo-i-ta 整備工場-複-分$_A$ ~ ?korjaamo-j-a 整備工場-複-分$_B$

(14) *ohjelmisto* 「プログラム」
?ohjelmisto-i-den プログラム-複-属$_A$ ~ ohjelmisto-j-en プログラム-複-属$_B$
?ohjelmisto-i-ta プログラム-複-分$_A$ ~ ohjelmisto-j-a プログラム-複-分$_B$

(15) *biologi* 「生物学者」
?biologe-i-den 生物学者-複-属$_A$ ~ biologi-en 生物学者-複属$_B$
?biologe-i-ta 生物学者-複-分$_A$ ~ biologe-j-a 生物学者-複-分$_B$

(16) *esitetty* 「提示された」
?esitety-i-den 提示された-複-属$_A$ ~ esitetty-j-en 提示された-複-属$_B$
?esitety-i-tä 提示された-複-分$_A$ ~ esitetty-j-ä 提示された-複-分$_B$

分析上の問題点。

- どの語幹にゆれが起こるかを判断する基準
- ゆれのおこる語幹での A, B 語尾の分布。複数属格 ･分格で、違いはあるか。

i 語幹、つまり語幹が短母音の i で終わる 3 音節以上の語幹においては、複数属格と分格で語尾選択傾向が異なる。

(17)	*seteli*	「紙幣」			
	setele-i-den	紙幣-複-属$_A$	~	seteli-en	紙幣-複属$_B$
	vs. setele-i-tä	紙幣-複-分$_A$	~	?setele-j-ä	お札-複-分$_B$
(18)	*sankari*	「英雄」			
	sankare-i-den	英雄-複-属$_A$		sankari-en	英雄-複属$_B$
	vs. sankare-i-ta	英雄-複-分$_A$	~	?sankare-j-a	
(19)	*veturi*	「機関車」			
	veture-i-den	機関車-複-属$_A$	~	veturi-en	機関車-複属$_B$
	vs. veture-i-ta	機関車-複-分$_A$	~	?veture-j-a	機関車-複-分$_B$
(20)	*kumppani*	「同僚」			
	kumppane-i-den	同僚-複-属$_A$	~	kumppani-en	同僚-複属$_B$
	kumppane-i-ta	同僚-複-分$_A$	~	?kumppane-j-a	同僚-複-分$_B$

2 コーパスの使用とデータの分類

コーパスの調査の利点と欠点。

- 有利な点
  - 実際に、言語使用の場で、語尾がどう選ばれているかを量的に知ることができる。
  - コーパス内での個々の語幹の相対的出現頻度を予備情報として知ることができる。
- 不利な点
  - 雑誌コーパスであり、執筆者をコントロールできない。したがって、方言差、個人差がみられる場合、その違いがしばしばコーパスデータでは相殺されている可能性がある。
  - データの分布が話者の言語意識に根ざすものであるかどうかの判断はコーパスからは客観的に導きにくく、データの解釈に依存する。

分類上の覚え書き。Terho Itkonen (1957 [8]) は 3 音節の語幹のみについて考察したが、今回は 3 ~ 5 音節の語幹について、データベースを作成した。分節はフィンランド語の一般的な基準に従い、また複合語の一部として使われている語形もデータに加えた。

3 語尾の「ゆれ」の基準

規範文法の側からの調査研究 (Nirvi 1945 [12]; Hurme 1953 [6])。

インフォーマントの意識調査に基づいた T. Itkonen による研究 (Itkonen 1957 [8]) ：3 音節語幹の 60 あまりの単語について、 A, B の各語尾をとる 2 種の語形から「よりよい」と思われるほうを選ばせる形式の調査を行ない、以下の 2 つの重要な語尾選択傾向を導き出した ：

- 広い母音ほど A 語尾を、狭い母音ほど B 語尾を好む。

- 語幹の後ろから 2 番目の音節が短い場合は A 語尾を、長い場合は B 語尾を選択する傾向がある。

今回集めたデータは、A, B 語尾を含む語幹をコーパスからオンラインで検索し、先に挙げた Itkonen の提案したこの 2 つの基本的な語尾の分布傾向に基づき、語幹末母音の質 (a/ä ~ o/ö ~ i ~ u/y)、語幹の後ろから 2 番目の音節の長さ ((C)V = 短音節; (C)VV, (C)VC(C), (C)VVC(C) = 長音節) で分類した。これにより、 2 つの要因がどのように語尾選択に影響するかを、量的に検討することができる。

4 i 語幹における語尾の分布

(21)i 語幹における語尾の分布

語幹タイプ	語尾	複数属格	複数分格
√ -短.Ci	A 語尾	41.6%	86.7%
		(219)	(378)
3 音節	B 語尾	58.4%	13.3%
		(308)	(58)
(参考)	A 語尾	24.7%	35.1%
√ -短.Cu/y		(18)	(39)
3 音節	B 語尾	75.3%	64.9%
		(55)	(72)

表からわかるように、u/y 語幹、i 語幹ともに語尾のゆれが観察される。しかし、u/y 語幹では複数属格 ·分格の分布がおおよそ一致しており、どちらも B 語尾が頻度的に勝っているのに対し、i 語幹の複数分格では、圧倒的に A 語尾の出現率が高い。この点で，データの分布は、Itkonen の調査結果とほぼ合致するものである。

複数属格の語尾選択比率に関して :先行研究との間で興味深い比率の違いがみられる。Itkonen の調査では、 4 つの語幹 (*sankari*　英雄」, *veturi*　機関車」, *patteri*　電池, ラジエーター」, 及び *seteli*　紙幣」) について意識調査が行なわれ、複数属格 A 語尾は 30% ~ 21% の比率で選択されている。調査方法が異なるので、Itkonen のデータとの比較には慎重でなければならないが、現時点で Itkonen の調査から 40 年以上が経過しており、複数属格の語尾選択傾向に変化が起こっている可能性がある。

(22) 参考 :19 世紀末の文語における 第 2 音節の短い 3 音節の i 語幹 (√ -短.Ci) の複数属格 · 分格異形態の分布 (Uosukainen 1969 [18,34;44])

格	語尾	1870–79	1880–84	1885–1889
複数属格	A 語尾	5%	3%	3%
	B 語尾	95%	97%	97%
複数分格形	A 語尾	80%	89%	82%
	B 語尾	20%	11%	18%

Uosukainen のデータは、前世紀後半のフィンランド語の文語では、i 語幹の複数属格における語尾の分布は、現代よりも B 語尾優越の方向に傾いていたことを示している。他方、注目に値するのは、i 語幹の複数分格における特異な分布傾向のほうは，一世紀以上にわたりかなり安定した分布を示していることである。

では、i 語幹の示す分布について、その実態をもう少し詳しく調べてみよう。i 語幹のなかには、複数属格 ・分格ともに B 語尾をとる傾向があるものと、上で見たように複数属格 ・分格でとる語尾の傾向が異なるものが混在しているように思われる。これまでの例 (8), (15), (17–20) を参照。そこで、コーパスからのデータを詳しく内容分析した結果、語幹のうち、-ri, -li で終わるもの ($\surd$ -ri, -li) とそれ以外の i 語幹名詞類とで、著しい分布傾向の違いがあることがわかった。多音節の i 語幹のうち、最も頻度の多い第 2 音節の短い 3 音節 i 語幹 ($\surd$ -短.Ci) について、語幹の下位分類を示すと以下のようになる。

(23) i 語幹名詞類の下位分類

語幹タイプ	語尾	複数属格	複数分格
$\surd$ -短.ri, -短.li 3 音節	A 語尾	50.9% (205)	96.8% (360)
	B 語尾	49.1% (198)	3.2% (12)
その他の $\surd$ -短.Ci 3 音節	A 語尾	11.3% (14)	27.7% (18)
	B 語尾	88.7% (110)	72.3% (47)

註 ：-li で終わる語には B 語尾のみをとると思われる語も含まれている (*Tamil* 「タミル人」: Tamili-en, 複属$_B$ 頻度 7, など)。また、その他の $\surd$ -短.Ci 語幹に属する語の中にも、タイプとして -ri, -li と同じ分布を示す語 *kummppani* 「同僚」がある: kumppane-i-den (属$_A$, 頻度 8), kumppani-en (属$_B$, 頻度 4); kumppane-i-ta (分$_A$, 頻度 14), kumppane-j-a (分$_B$ なし)。したがって、*kumppani* を除くと-ri, -li 以外の語幹グループの分布は複数属格 ・分格ともさらに B 語尾優位になる。

-ri, -li で終わる語幹とその他の語幹には、語尾の選択傾向において著しい違いがでている。-ri, -li 語幹では、複数属格で語尾選択がほぼ拮抗するのに対し、複数分格ではわずかな例外を除き殆どが A 語尾をとって現われており、その選択比率は約 97% にもなる。いっぽう、 -li, -ri 以外の語幹では一転して複数属格 ・分格ともに B 語尾が多数を占める。

(24) *lääkäri* 「医者」
lääkäre-i-den 属$_A$ 頻度 8　lääkäri-en 属$_B$ 頻度 20
lääkäre-i-tä 分$_A$ 頻度 17　lääkäre-j-ä なし

(25) *porvari* 「ブルジョア」
porvare-i-ta 属$_A$ 頻度 3　porvari-en 属$_B$ 頻度 13
porvare-i-ta 分$_A$ 頻度 5　porvare-j-a なし

(26) *gallup* 「世論調査」
gallupe-i-den 属$_A$ 頻度 1　gallupi-en 属$_B$ 頻度 19
gallupe-i-ta なし　gallupe-j-a 分$_B$ 頻度 8

(27) *ikoni* 「イコン」
ikone-i-ta 分$_A$ 頻度 1　ikone-j-a 分$_B$ 頻度 1

4.1 √ -ri, -li 語幹における語尾選択傾向の独立性

√ -ri, -li 語幹が複数属格 ・分格の語尾選択において極めて安定したグループを形成していることは、コーパスデータからさらに裏付けられる。4 音節語幹、および 3 音節で第 2 音節の長い語幹においても、u/y 語幹と比べ複数分格で A 語尾が高い比率で出現する。

(28) 4 音節 i u/y 語幹での複数属格 ・分格異形態の分布

語幹タイプ	語尾	複数属格	複数分格
√ -短.Ci	A 語尾	27.3%	55.7%
		(35)	(44)
4 音節	B 語尾	72.7%	44.3%
		(93)	(35)
うち √ -短.ri,	A 語尾	45.5%	84.0%
-短.li		(35)	(42)
4 音節	B 語尾	54.5%	16.0%
		(42)	(8)
(参考)	A 語尾	3.4%	1.4%
√ -短.Cu/y		(5)	(2)
4 音節	B 語尾	96.6%	98.6%
		(141)	(143)

(29) *orkesteri* 「オーケストラ」
orkestere-i-den 属$_A$ 頻度 12　orkesteri-en なし
orkestere-i-ta 分$_A$ 頻度 7　orkestere-j-a なし

(30) *professori* 「教授」
professore-i-ta 分$_A$ 頻度 2　prfessore-j-a 分$_B$ 頻度 1

(31) *ekonomi* 「経済学士」
ekonome-i-den なし　ekonomi-en 属$_B$ 頻度 2
ekonome-i-ta なし　ekonome-j-a 分$_B$ 頻度 1

語幹の後ろから 2 番目の音節が長い場合、i 語幹では、語幹末の母音の質と音節長の基準はどちらも B 語尾を予測する。実際の分布もその予測を裏付けるものである ：

(32) 第 2 音節の短い 3 音節の i, u/y 語幹 (√ -長.Ci, -長.Cu/y)

語幹タイプ	語尾	複数属格	複数分格
√ -長.Ci	A 語尾	0.7%	5.2%
		(4)	(30)
3 音節	B 語尾	99.3%	94.8%
		(573)	(575)
(参考)	A 語尾	0.7%	0.2%
√ -長.Cu/y		(1)	(1)
3 音節	B 語尾	99.3%	99.8%
		(147)	(421)

しかし，-ri で終わる語幹では，A, B 語尾がほぼ一対一の比率で現われている。

(32') 第 2 音節の短い 3 音節の i 語幹 (√ -長.Ci) の内訳

語幹タイプ	語尾	複数属格	複数分格
√ -長.ri,	A 語尾	2.4%	49.0%
		(2)	(25)
3 音節	B 語尾	97.6%	51.0%
		(85)	(26)
-ri 以外の	A 語尾	0.4%	0.9%
√ -長.Ci		(2)	(5)
3 音節	B 語尾	99.6%	99.1%
		(488)	(549)

3 音節の語幹で第 2 音節が長い場合、複数分格で A 語尾をとるのは-ri 語幹に限られ、-li 語幹は残りの語幹と同じくふるまう。-ri 以外の語幹は *u/y* 語幹と同様、狭母音語幹と第 2 音節の長さから予測される B 語尾が出現語尾の殆どを占めている。

(33) *kulttuuri* 「文化」
kulttuure-i-den なし kulttuuri-en 属$_B$ 頻度 40
kulttuure-i-ta 分$_A$ 頻度 3 kulttuure-j-a 分$_B$ 頻度 2

(34) *normaali* 「標準的な」
normaale-i-den なし normaali-en 属$_B$ 頻度 9
normaale-i-ta なし normaale-j-a 分$_B$ 頻度 9

5 まとめ

参考文献

[1] Alhoniemi, Alho (ed.) 1978 *Rakenteita. Juhlakirja Osmo Ikolan 60-vuotispäiväksi 6.2.1978*. Turku, Finland: Turun yliopiston Suomalaisen ja yleisen kielitieteen laitos.

[2] Anttila, Arto 1995 *Deriving variation from grammar: A study of Finnish genitives*. Manuscript. Stanford University.

[3] Carstairs, Andrew 1987 *Allomorphy in Inflection*. London, Croom Helm.

[4] Eronen, Riitta 1994 "Taivutuksen osoittaminen Perussanakirjassa. Miten sanakirja luetaan? (『ワィンランド語基本辞典』における活用の表示 :辞書をどう読むか ?)", *Kielikello* 1994/3: 16–18.

[5] Haarala, Risto (Chief Editor) v. *Suomen kielen perussanakirja*.

[6] Hurme, Taina 1953 "Monikon partitiivimme rinnakkaismuotoisuudesta (フィンランド語の複数分格のゆれについて)", *Virittäjä* 1953: 191–197.

[7] Häkkinen, Kaisa 1978 "Suomen kielen tavuttamisesta (フィンランド語の分節について)", in Alhoniemi, Alho (ed.): 13–28.

[8] Itkonen, Terho 1957 “*Mellakoihin* vai *mellakkoihin*? Yleiskielemme eräiden taivutushorjuvuuksien taustaa (*Mellakoihin* それとも *mellakkoihin* ？標準フィンランド語におけるいくつかの屈折の揺れの背景)”, *Virittäjä* 1957: 259–286.

[9] – 1983 *Suomen kielen äänne- ja muotorakenne* (フィンランド語の音韻 ･形態構造). Porvoo, Finland: Werner Söderström.

[10] Karlsson, Göran 1978 “Kolmi- ja useampitavuisten nominivartaloiden loppu-A:n edustuminen monikon i:n edellä (複数 i の前での名詞類多音節語幹末の A の現れについて)”, in Alhoniemi, Alho (ed.): 86–99.

[11] Kettunen, Lauri 1949 *Hyvää vapaata suomea* (よい、自由なフィンランド語). Jyväskylä, Finland: Gummerus.

[12] Nirvi, R. E. 1945 “Voidaanko monikon genetiivin monimuotoisuutta supistaa? (複数属格の格形の煩雑さは軽減できるか ？)”, *Virittäjä* 1945: 477–489.

[13] Paunonen, Heikki 1974 *Monikon genetiivin muodostus suomen kielessä* I (フィンランド語における複数属格の形成. I). Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.

[14] – 1976 “Allomorfien dynamiikkaa (異形態現象のダイナミックス)”, *Virittäjä* 1976:82–105.

[15] Sadeniemi, Matti 1949 *Metriikkamme perusteet* (フィンランド語の韻律の基礎). Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.

[16] *Suomen kielen perussanakirja*. = Haarala, Risto (Chief Editor), 1990 (Vol.1), 1993 (Vol.2) & 1994 (Vol.3), *Suomen kielen perussanakirja* (フィンランド語基本辞典). Helsinki, Finland: Kotimaisten Kielten Tutkimuskeskus.

[17] Tuomi, Tuomo (compiler) 1980[2] *Suomen kielen käänteissanakirja* (フィンランド語逆引き辞典). Helsinki, Finland: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.

[18] Uosukainen, Riitta 1969 *Matalata ∼ matalaa, avannoita ∼ avantoja, ratkaisuiden ∼ ratkaisujen ? Eräiden sijamuotojen äännelaillisten ja analogisten varianttien yleisyyssuhteesta 1870- ja 1880-luvun proosassa* (*Matalata* それとも *matalaa*, *avannoita* それとも *avantoja*, *ratkaisuiden* それとも *ratkaisujen* ？1870 年代から 1880 年代の散文におけるいくつかの格形の音韻法則形と類推形の分布について). Unpublished Dissertation (Suomen kielen sivulaudaturtyö), Helsingin yliopiston Suomen kielen laitos.

[19] Vesikansa, Jouko 1977 *Johdokset* (派生語). Nykysuomen oppaita 2. Porvoo: Werner Söderström
Osakeyhtiö.